

相談ネットワーク通信

2017.4.14(金)

子育て・教育なんでも相談ネットワーク

No.97

700-0822 岡山市北区表町1-4-64 上之町ビル3F

TEL・FAX 086-226-0110 Eメール: soudan-net@vivid.ocn.ne.jp

ホームページアドレス <http://www.soudan-net.sakura.ne.jp>

食べた そして笑った笑った

フリースペースあかね 事務局長

佐藤嘉子

親の会の歴史を振り返ってみると

フリースペースあかねが生まれたのが二〇〇一年四月。その年の十一月に親の会が発足したので、親の会の歴史もあかねと同じでもう十六年になります。

最初のころは、「あかね色の空を見たよ」の映画活動をしてきた仲間たちと一緒にわが子と向き合った経験話をしていたように記憶しています。その頃の私は、あかねのスタッフではなく「あかね色の会実行委員会」の一人として参加させてもらっていました。いつの間にか、親の会の先輩である横川さん、中田さんと

一緒にスタッフの仲間入りをさせてもらっていました。

親の会ができた頃は、朝十時から始まりお昼になっても話は尽きず、いつの間にか農家のお嫁さんである横川さんが、いえの畑から採って来てくれた新鮮野菜を使っているようなものをお母さんが、泣きながら作って、みんなで一緒に食べるようになってきました。

今から十年ほど前のことです。いつものようにお昼、私たちが作ったご飯をいっしょに食べていたお母さんが、泣きながら「あつたかいですねえ」と言われ、私たちは、

「ご飯は炊き立てだし、野菜も今コンロから下ろしたばかりですからね。」

と言うと、

「ううん、そうじゃなくてご飯もあつたかいけれど、ここにいるみなさんがあつたかくて、今まで悲しくて辛かったのに、心が温かくなつて嬉しんです。」

と、最初から最後まで泣きながら食べた思い出があります。

私たちも、子どもが不登校真つ只中、目の前にいるお母さんと同じ想いをして苦しく、光が見えないまま何年も一人で悩み、食事ものを通らず、通ったとしても味もなくそんな経験をたくさんしてきました。

ご飯を作る気がしないなあ。だれか作ってくれないかなあ。もうどこか行きたいよ……。

はあく逃げたい・・・。
 と思うばかりで身体がガチ
 ガチになっていったこともよ
 くありました。

お母さんたちは、休む暇な
 く毎日我が子と向き合い、
 いろいろと神経をすり減ら
 し、家族の食事も作れる状
 態ではないけれど、家族の
 ためにがんばっている。本
 当は泣きたいけど、家族の
 前では泣けない・・・。
 そんな時だれかがご飯を作っ
 てくれたらどれだけ嬉しい
 か!!

何も言わず、ただただ苦
 しい気持ちを受け止めても
 らいながら、泣きながら、
 笑いながら、でもどんな形
 でもいい、目の前のお母さ
 んたちのありのままの姿を
 受け入れてあげたい。そん
 な気持ちしかなく、あるも
 のでおかずを作り、みんな
 で食べるということが楽し
 く疲れた心をこんなに癒し
 てくれるんだという経験を
 親の会でさせてもらいまし
 た。

食べながらおしゃべりを
 する。おなかもココロも満
 腹・・・女性はそれが一番
 の幸せなのでしょうね。

親の会ができた頃から、
 みんなで一緒に食べる、お
 しゃべりする、聴いてもら
 うことをしていたら、だん
 だんと目の前のお母さんた
 ちが元気を取り戻し、まだ
 会ったことのない子どもさ
 んも動きが出てきたりする
 ような変化も少しずつ出て
 きたのです。

そこでお母さんたちが元
 気になれば自然と子どもた
 ちも元気になってきている
 ということも感じるように
 なりました。そういうところ
 から、この言葉が誕生し
 ました。

「親が元気になれば子ども
 も元気になる」

いつの間にかあかねに相
 談に来られたお母さん、お
 父さんにこの言葉をかける
 ようになつていました。今
 現在も親の会や、相談の時
 に何度も何度も出る言葉で
 す。この言葉も大切ですが、

やっぱりみんな一緒に何か
 を食べながら話せる、聴い
 てもらえることで気持ち
 楽になつていることも実感
 しました。

だんだんと親の会に来ら
 れるお母さんたちも多くな
 り、なかなか食事も作れな
 くなりしましたが、十四年間
 ずっと第二土曜日には、豆
 から挽いたコーヒーの美味
 しそうな匂いがほんわかし
 てきて、おやつを食べなが
 らおしゃべりすることによつ
 てココロの荷物がとれていっ
 ていきますよね。

私たちのできることは、
 会の中でお話を聴くだけな
 のです。私たちスタッフも
 同じような経験をたくさん
 してきて、山のような失敗
 のポケットを持ち、その失
 敗談をみんなと共有しなが
 ら、お母さんたちの中で、
 「私だけじゃないんだ！」
 と言う安心感が生まれてき
 ました。そして、だんだん
 とお母さんが元気を取り戻
 している気がしてきました。
 毎月毎月お母さんたちが変

わつていく様子、笑顔が増
 えていくのが嬉しくて、私
 たちスタッフの元気の源に
 もなっている感じですよ。

親の会って、そこに来て
 いるお互いがお互いを元氣
 にしていくというか、見え
 ない何かがうごいていてと
 いう不思議な感覚です。

それとこの頃親の会で感
 じることなのですが、スタッ
 フだけ聴くというのではな
 く、何年も何年も親の会や
 あかねに来てお母さん
 たちが、自分の経験を話し
 てくれ、初めて来られたお
 母さんの話を聴いてくれる
 ようにもなりました。これ
 も、自分から進んでしてく
 ださるので本当にありがた
 いです。

つづく

さとう よしこ



ニュージーランドで感じた 学校のあい方



相談ネットワーク会員

安部 哲志

一月末から二週間ほどニュージーランド北島で妻と二人で過ごした。アパートや日本人経営のB&Bに滞在しながら、カウリの森や小鳥の島(ティリテイリマタンギ島)の自然に浸ったり、ロトルアの街歩きやレイクカヤックや乗馬等を楽しんだりした。

前回は今回も偶然ステイ先に小学生・中学生の子どもさんがおられた。いろんな訪問客に出会う機会が多いし個性もあることだろうが、みんな伸び伸びとして自分の考えをしっかりと持っている印象だった。日本の同年代の子ども達ではなかなか見られないなと感じた。

興味深かったので、いくつか学校生活について尋ねてみた。「長期休暇は宿題等は全くない」「下校時間が三時過ぎ(中高生も)」「小学生の登下校は原則親が送迎」等だった。一年を通して学校に拘束されてい

る時間だけを考えてみても、その後の塾通いが当たり前?の日本の子ども達とは「勉強の時間数」では格段の差である。それでいてこの違いは何? 「人格の形成と学校の役割」について考えさせられた。

日本では一般的に「教える側」の視点であれこれやっているが、「成長する側」の視点が弱すぎるのではないだろうか。岡山の学校教育行政は「学力テストの順位向上」に必死になっっているが、私には「やらせる側」の横暴としか映らない。小さなフィールドでの競争に無理やり駆り立てるのではなく、それぞれの子ども達の生き方を広げるには止めた方がよいこともある。

年々「子どもの貧困」が取り上げられ、全国的に「子ども食堂」などの取り組みが報じられている。確かに経済的な貧困は大きな問題ではあるが、人間とし

ての成長という観点から考えると、忙しすぎる日本の子ども達のくらし方自体が「貧困」といえるのではないだろうか。このことは『何故それを?』と立ち止まって考えることなく、『如何にそれを?』と追い立てられる学校の先生方にも相通するものである。

かつて「教育ママ」と揶揄された言葉があったが、子ども(発達の主体)の成長の阻害要因は「子どもの世界」を削ぎ取っていった「教える側」の主観的思い込みが大きいように思う。学校教育の貧困ともいえるのではないか。

「小学生の登下校は原則親が送迎」が意味するものは、大人の働き方の背景があればこそ可能な事であるが、ここでも『豊かさ』とは?を考えさせられた。

二〇一七年 三月

あべ てつし

読んで 読んで! 「みかづき」

大学 非常勤事務職員



森 絵都 作

堤 知美

戦後はもう遠くなりつつ、そして、高度経済成長時代へと投入する時代を舞台に物語は始まる。戦争で、モノの価値観が変わり、軍国主義から民主主義の「教育」へ大転換の舵を取った日本社会で、当然のように大人たちは子どもたちにしてやれることは「教育」しかない、という思いは強く、そこに「学習塾」が出現したのはまさに必然だった。

そんな一九六一年の小学校用務員室に、子どもたちが次々集まる。そこでは、若い用務員の(大島吾郎)が、子どもたちの勉強を見ていた。吾郎の教育方針は、「やる気を引き出す」「目をしつかり見る」、学ぶ意欲のある子、自主性のある子は必ず伸びる、というものだ。

吾郎自身は、戦争で家も財産も失い、進学を断念した中卒という学歴である。しかし、吾郎の子どもを見

る目は冷静で、一人一人に合った教え方を根気よくするものだ。この吾郎の教育に関心をもった、保護者の(赤坂千明)は、娘(蒔子)を用務員室に内偵させて吾郎に近づく。千明もまた教育に思いをもった女性だった。戦時中の教育から戦後の教育の転換で、文部省(当時)に反骨精神むき出して、公教育とは違う教育現場で子どもたちへ「真の教育をする」「生きる力」を(育む)、と、「学習塾」の拡大に吾郎を巻き込んでいく。

夫婦になった二人は、千明の母(頼子)の協力のもと、蒔子に加え(蘭)(菜々美)の娘たちが成長するよう、学習塾「大島塾」は「千葉進塾」へと大きく成長させていった。

しかし、塾を継いでくれると思っていた長女の蒔子は、母の公教育批判に反抗し、「真の教育」を確かめ

たいと、小学校教員の道を選択する。そして、次女の蘭は、独自の経営手腕を発揮し、新しい塾経営に乗り出す。また三女の菜々美は、高校受験をしないと千明に反抗するが、親友との関わりから一転受験勉強に取り組み、その後海外で語学勉強をしながらボランティア活動の幅を広げていく。三人の娘たちがそれぞれも道を歩むと共に、頼子の死により吾郎と千明もまた別の道を歩むことになる。

時代は現代へと移り変わり、蒔子は千葉進塾の講師だった男性と結婚し、一男一女をもうけるものの、夫を交通事故で亡くし、千明の元に戻ってきていた。蘭は塾経営で汚点を残し潔く転身し、弁当屋を年下の夫と始める。菜々美は海外でシングルマザーになり、一人娘を連れて帰国し、ピルの事務員をしている。

蒔子の長男一郎は、悉く

就職試験に落ち、祖母千明の死も千明の思いも昇華できないうちに、叔母蘭の夫から弁当配達の仕事に頼まれる。配達先のお客さんとコミュニケーションをとることも仕事の範疇だったことは、一郎のやさしさやおっとりした性格に合っていた。弁当の配達先のおばあさんの部屋に来る(萌)が、ある日、勉強ができない、学校の先生からも無視されている、という事情を聞き、一郎が萌の勉強を見てやることになる。萌は元来、勉強のできる子だった。萌の母親はシングルマザーで、働きづめで、萌の面倒を見る余裕もなかった。一郎は、萌のような子どもに無償で勉強を教えたいとNPOを立ち上げる。

教育の格差社会に苦しむ子どもたちに平等に学ぶ場を与えたい、と苦心する若い一郎は、祖母千明や父の教育者としての思いに馳せ、自分にもその血が流れてい

ることを実感する。一郎の取り組みは、場所、人、お金、があつてこそ続けられていく。菜々美の勤めるビルのおーナー坂本氏の助言は大きい。森 絵都の作品には、良い大人が登場する。

先日、職場で学生が手続き書類に写真を貼っていないかつたため、写真だけ持ってくるように伝えたところ、元教員の事務職員に「書類を全部返さないのか、写真だけ持ってくるんですか」と言われたので、「持つてくるでしょう、どうしてそう思われるのですか」と聞いたところ、「性善説にたっているんですね」と言われた。大人が子どもを信用しなくてどうするのか、と思つたが、この方は、教育現場で相当苦労されたのでしよう。しかし、子どもは本来「悪い子になろう、悪い大人になろう」と成長するのではないと思う。周りに良

い大人がいることが大事だと思ふ。性善説にたつて学生と接したいと思ふし、『みかづき』の大人たちの善人の心は教育への光に続く影であり、指針だと思ふ、そういう大人でありたいと思つた一冊である。

つつみ ともみ



みかづき

集英社
472頁
1998円

私が、堤さんに紹介されて、県立図書館に予約を申し込んだら、「49番目です」と言われました。大勢の方に待たれています。



高校生の頼もしさを感じ、 励まされたひと時

ネットワーク相談員

石井信行

先日、高校一年生に話をさせていただく機会がありました。内容は「人間関係づくりに関わる諸問題とその対処法」という要請でした。

私は、自分の教員生活の中で、児童生徒と自分自身を見つめなおす転機になったのは何だったのかを話すことにしました。

それは、「おおきなかぶ」という小学校一年生の国語の教科書に出てくる民話を書いた人(西郷竹彦氏)の、「説得の論法」という説明文の読み方を中心にしたものの見方考え方に出逢ったことでした。

そのことを、一年生の説明文教材「しっぽのやくめ」と、矢崎節夫さんの詩「まっくら」を使って、反復・比

較(類比と対比)・関連などを説明し、これを使って、私自身を分析してみると、自分自身の欠点を逆の面からみると、長所にもなるのではないか、弱点も逆に武器になるのではないかと考えるようになったことを話しました。

そして、自分自身を中心にして、クオークの極小世界から三百億光年の極大世界まで広がる空間軸という横軸があり、過去・現在・未来の時間軸という縦軸があり、いろんなことが分らない、分からないこと・知らないことがいかに多いかに気付かされ始めると、子どもを見る目が、上から目線ではなく、共に学び合おうとする姿勢に変わってきたように思われることを話しま

した。
この年になっても、自分自身がまだまだ進むべき道ははつきりとはしていないけれど、私よりも五十歳若い皆さんは、たくさんの人と出会って、共に学び合いながら、瞳を輝かせて自分の道を切り開いてほしいと言って話を終わりました。

感想の中に次のようなものがありました。女子生徒のものでした。

「相手のことを思って自分の行動をしているか考えたとき、じぶんはできていないなと思えました。だから、今回の石井さんのお話を機に、自分を見つめなおし、心優しい人になれるようにしたいです。大人になった時に、こんなことがあったなど、笑って言えるような人生を送れるようにしたいです。今の目の輝きを大切にしたいです。今日は、ありがとうございました。」

ところがこの女子生徒は

私への質問に次のように書いていました。以下Q&A

Q..友達との関係で、何かあるとすぐ自分を責めてしまいます。そして、友達との間にかべができたように感じてしまいます。こんな自分を直したいのですが、どうすればいいのかわかりません。私は、どうすればいいのですか?

A..あなたは感想に、「心優しい人になりたい」と書いていましたね。「大人になった時、こんなことがあったと、笑って言えるような人生を送れるようにしたいです。今の自分の目の輝きを大切にしたいです。」とも書いていましたね。この中に、すでに答えが入っていると思います。

「自分を責める気持ち」「友達との間にかべができたように感じてしまう」と、「こんな自分を直したいんだけど、どうしたらいいかわからない」ことをそのまま友達に伝えること

ができたなら、もつと分かってあえる関係になるのではとも思います。

この女子生徒は、どうすればいいか分からないことを乗り越えた自分を想像できています。だから、「この中に答えが入っていると思います。」と書きました。「自分の感じたことをそのまま伝えることができたなら、もつと分かりあえる関係になるのでは」とも書きましたが、すでにこの女子生徒は、知らず知らずのうちにやっているのではないかと思っています。

いしいのゆめき



今朝、町内会の総会があり、起恵子と二人出席しました。わたしたちは、町内の水路沿い道路にガードレールを設置してほしいとの要望をしていました。私の居住区は市街化調整区域で、道路はそのまま地権者名義になったまま。この道路を市道にした上でないと設置は困難とのことでした。「水路沿い道路が暫定市道になったので、改めて要望書を出してもらいたい」と、先夜、町内会役員の方が訪問。そこで、要望書を作成し、提出しました。現住所に引越して八年。隣家との交流はありませんが、今だに五〇程の町内の方の名前もわからないまま生活しています！それでも、別段支障なく生活できているのです。一杯飲んで尋ねてこられた役員の方は、盲学校のスクールバスの運転をされているそうで、「理療科の教頭先生を知っているか……」などと、話に花が咲きました。総会では、スクールバスドライバーの方から安全柵設置の提案があり承認されました！今朝は生ゴミ収集日。右手に白杖、左手ゴミ袋を持って、ごみステーションに向かいました。途中、行き会った方に「おはようございます」と元氣よく挨拶しました！「柵がつくようになったらいいな、よかったな」と声もかかりました！

車に撥ね飛ばされた東京の方から、「実現するのいいですね。そうしたら、一人でバス停から岡崎さんの家に行きますよ」とのメールが届きました。

岡崎 茂明

用水路沿いの道路にガードレール設置を！ ～願いが実現する日へ～

昨日、用水路への転落事故が頻発し、社会問題にもなっています。



岡崎さんは、バス利用やゴミ出しの際には水路沿いを通行しなければならず、日々転落の恐怖におびえながら生活しているそうです。実際ゴミ袋を持ったまま水路に落ちたこともあるそうです。

私も、下校中に車をよけるために端っこに寄って自転車ごと落ちたという中学生の話も聞いたことがあります。

岡崎市は、たくさんの用水路があり、危険な箇所がたくさんあるようです。願いが実現するのいいですね

A

—今の私を責めないで、未来の私を励まして—

生まれ育ち、学びながら育つということ⑦
10年ぶりの7レンジャーとの同窓会Ⅱその6Ⅱ

高卒認定フジゼミ講師 志賀兼允



「先生、みやげじゃあ！わしらの気持ちじゃけえ、受け取って！」と言って、いつものポリデントと靴下と小さな箱を手渡してくれた。私は中身の分からない小箱を皆の前で開けた。それは黒光りする『COMME CA DUMODE』と銘打ったシャレた携帯用灰皿であった。

「先生、覚えとる？」

「あんなあ、ようわしらがトイレでタバコ吸うとる時、ゆっくり一人でわしらのたまつとる所へ来て『おい、どうしとんならあ、こんな所で？』言いながら、わし等とおんなじようにべべチャ

ンコして、話を聞きに来たような顔をして近づいて来たじゃろう？わしらは煙草を思わず後ろに隠したけど、先生にはバレとったはずじゃのに別に怒る事もせんぞ『どうしたん、授業は、と』の昔に始まつとるけど…』と笑いながら近づいてきた事がようあつたなあ。そして色々わしらの話を聞いてくれ、その後、ここにこしながら『ほんで、どうするんこれから…』と問うて、約束させられたよなあ。怒つとる時は、いつつもニコニコするけえ『こりやあ相当、腹の中じゃあ怒つとるなあ』と思いつつながら、教室へ戻つたけど…」

「いつじゃったか、よう覚えとらんけど、わし等が教室に戻ろうとした時、先生が『もう、トイレや渡り廊下に煙草の吸い殻を捨てるなよ。片づけるもんの身にもなつてみい』言うて『今日、携帯用灰皿を持ってきたけえ、ポイ捨てだけはすんな』言うて、わし等に3つほど携帯の灰皿くれたことがあつたらう？あれにやあ、びっくりこいたよ。『お前、ほんまに教師かあ！』教師にも色々おるんじや思つた。というか、わし等の話を聞いてくれる大人がおつて、信じにやいけん人もおるんじや思つたよ。」

実はなあ、先生、わし、あの次の日から煙草止めたよ。気づいとつたあ？まあええわ、そぎやあな事は、実はな、先生は今日もスパ煙草吸うとつたけど、昔、胃痛にもなつとつたんじやし、もうなんじやけえ、それに長生きしてもらわんとはいけんけえ、皆と話しおうて、一日、携帯用灰皿いっぱいになるくらいに煙草を減らしてという事でみやげにしたんよお。今日は、わし等がたばこ指導するけん」

と笑いながら品物の説明をしてくれた。

「全部話したら、もう会うても話題がのうなつたらいい

けんげえ」という事で、というより明日の仕事と家族を思う優しさからか、一回目の再会は予定時間を若干過ぎたけど三時間余りで閉じる事となった。懐かしい記憶を呼び覚まされながら、次の再会を約して、10年ぶりの同窓会は終わった。

「学校」は今、客観的装いをした浪費を重ねるだけの無意味で虚しい数値で人を計り、人間に対して攻撃的になっていく。曖昧さを許さない画一主義がはびこり、人間臭さが消え去ろうとしている。調査・点検主義が人々の自由な精神を奪うだけではなく、物理的にも子どもとのかかわりの時間を奪い去っている。学校が形式主義に陥り、社会から隔絶された特殊な世界に閉じこもるとき、温もりのない、金属的な人格が生み出されていく。それは学校がもはや人格を磨く場から、材料としての人材の育成の場に変質していることである。

学校はもつとあいまいであつていいのではないだろうか。というか、社会そのものがもつとおおらかで、あいまいなままでいいのである。人間は、そもそもロボットのような性格でもないし、ボタン一つでいいいなりになる存在でないのである。「にんげんくくく、なんだろう」といいなあと思う。そこには、宗教も言語も民族も何の壁もないのだ。連帯して生きていける人間の姿がそこにある。今を共に生きていく人間同士のふれあい、ささえあいがあるのだ。という。学校は、もつともつと、もつと自由でおおらかで、毎日通いたくなるような、楽しい空間であつていいのではなからうか。そして「辛い時には辛いと言え」「うれしいことがあつた時は、うれしい！」と叫び、それをみんなで共感しあえる信頼と安心に満ちた時空間の中でそれぞれ

らしさがふるまえる、そんな場所であるべきではなからうか。10年ぶりの同窓会、その出会いの後、私はそんな思いを抱きながら家路に向かった。

「教育において、第一に成すべきことは、道徳を教えることではなく、人生が楽しいという事を、身体に覚え込ませる事なのです」
(永井均)

「生きる理由がうまく見つけれない人に、人生が生きるに値するものと納得させるのは難しい。生きる事は楽しい事だという肯定感が底にないと、自分の人生をしかと肯定できない。だから子どもに不幸な傷があつても、それ以上に楽しい経験をまわりが与え続ける事。ルールを教えるのはその後だ。」(折々の言葉43―朝日新聞2015.5.14)

「私にとって最悪だと思われるのは、学校が主として、

恐怖、力、人工的な権威というものを用いる事です。そのような扱いは生徒の健全な情緒、誠実さ、自信を破壊します。それが作り出すのは従順な臣民です」
(アインシュタイン)

☆後日談…太一は数年前、大きな造船所を辞し、職人仲間数人で起業し、社長さんにおさまっている。毎年、結婚して授かった二人の子どもらの成長ぶりを伝える賀状を見ながら「人間は一人残らず違う」のであり「人間的なかわりの中で」「必ず変わらう」という事を伝えてくれた仲間に遠い所から幸い多き未来の道を！と祈るのである。

しが かねみつ



無謀な世界一人旅 ⑮

～まだ見ぬ天使に会うために～

相談ネットワーク

正保 宏文

まだ見ぬ天使に会うために

日本を出て16日目。今、ドュッセルドルフに向けて、フランス上空を飛んでいる。ANAの系列の世界一周航空券を買ったので、ローマに行くのに遠回りしなければならぬのだ。

20年前の小生に一人で世界旅行をしている今の自分を想像できたであろうか。否、絶対否である。20年たつて自分も少しは、成長したのかなと思う。なぜ、無謀な世界一人旅ができるようになったのか。その理由は、十年前の中国へ旅をしたからだ。小生は西安の大慈恩寺で普慈の掛け軸『夢』を買った。そして、自分の夢について考えた。なけなしの頭で考えた結果が、世界190余か国あるそのうちの約半分に対応する100か国をまわってやろうと秘かに決意したので。今回、回る国が7か国。今までのだぶりを除いて、1

4か国となった。まだまだである。でも、足を踏み出すことにより、夢が現実にならざるを得ない。言葉の壁や生活習慣の違いがあつて、なかなかスムーズにいかなくつたが、旅のコツみたいなものが、少し見えてきた感じだ。語学が堪能であるに越したことはないが、語学力なしの小生でも、何とかなるといふ変な自信もつてきた。

人間は、えてして臆病になりがちだ。失敗したらどうしよう。不測の事態が起きたらどうしよう。などなど、マイナスの面ばかり考へて、足を一歩踏み出せないでいることが多いことか。人から無謀と言われようが、なんとかわれようが、たった一回の人生、前進あるのみである。

財布を掏られるという苦い経験を良薬として、スペインからの旅は、常に気を引き締めて行動してきた。ちよつぱり勇気さえあれば、旅は何とでもなる。困った

ときには、必ず自分を助けてくれる人がいる。日本語と若干の英語でも旅先で心通うとき、人間っていいなあと思う。そこには、宗教も言語も民族も何の壁もないのだ。連帯して生きていく人間の姿がそこにある。今を共に生きている人間同士のふれあい、ささえあいがあるのだ。

ニューアーク・リベラル空港へ行くとき愛の手を差し伸べてくれた中国人女性、マニラへ行くとき助けてくれたイギリス人紳士、ブラッド美術館で窮地を救ってくれた韓国人の天使、シャルルドゴール空港であった中国・ベトナム混血の天使、地球上にはいっぱい天使がいた。まだ見ぬ天使に会うために、さらなる旅が続いていく。

バチカン市国へ

今朝は、バスの40番でバチカン市国へ行こうと決めていた。昨日、ローマのホテルに着いてすぐホテルマンに訊いていたのだ。バ

ステーションに着いてみると、最初のバスは超満員。見送って次のバスを待つ。しかし、切符の買い方と値段が不明。運転手に聞いても話にならず、やっぱり切符を買うのは、むずかしい。そこへ正義の味方の好青年。1.5ユーロだと教えてくれて、切符を買って処理までしてくれた。ありがたい、ありがたい。ホテルマンが教えてくれたバスタップで降り、自分の方向感覚に頼って、いざ、バチカン美術館へ。美術館へ着く手前で、歩道の真ん中にロープが張られ、左右に分かれている。小生は、動きのよい方が個人客、左が団体客だと思っただけで、なんと、右は何かキツプみたいなのをもった優先ルート、小生は最初から並びなおし、これで約十分の損、とほほ。。。

美術館に入っても初めてなので、館内の様子が分からず、幾多のお宝を消化できないまま何となくまわって、最後のところで、左に行くべきところ、進入禁止を知らぬまま右へ行つたからさあ大変。オーデイオを返す所が分からない。オーデイオと引き換えにパスポートを預けているのに。よくよとしていても仕方ないので、まっいいかと、サン・ピエトロ寺院へ行く。この間、ノートルダム大聖堂をはじめとしていくつかの教会を見てきたが、それらと比較ではなかった。驚天動地というかなんというか、言葉で言い表せないほどのすごい大聖堂がそこにあった。人間の建物に対するこだわり、寺院にせよ、宮廷にせよ、何百年も前に建てられたものが、今も人々をひきつけてやまない。しかもその美しさ、繊細さ、時代を超えた見事なデザイン、当時の建築家はもとより、それにこたえた石工、彫刻・絵画で貢献した芸術家たち、すごい創造力で、今まで誰も挑戦したことのないものに挑戦している。今を生き

る人間でさえ、なかなかできるものではない。人間の素晴らしさに励まされるところに旅の醍醐味があると小生は考えている。

今回の旅は、建築規模の大きさに圧倒され続けてきた。今日もオーデイオを返すことができなくて、右往左往した。サン・ピエトロ寺院に出たことで、見残しをチェックするために二回目の入場を許してもらった。そのため、一日に二回もバチカン美術館を回ったのだ。一回目回った時、何かしら物足りなさを感じていたのだが、受付の人にお願ひしてよかった。快く入場させてくれた。ありがたい、ありがたい。

ところで、ローマ市内で、足のない乞食を二人(うち、一人は手もなかった)と乞食のおばあさん二人を見かけた。物乞いをして生きているのだ。日本で

は今日ほとんど見かけなくなった光景である。どう考えたらいいのか、よくわからないまま、ホテルへ帰ってきた。イタリアの福祉は、どうなっているのだろうか。気のよい外国人目当ての乞食なのであるか。なげなしの頭で考えてみても、やっぱりわからなかった。

しょうほ つづく
ひろふみ



ら

く

ざ

ま

や

つばを口から離さなかつた兵士になるな 作るな
平和こそ すべてのおきて
行け行け 子どもたちよ
希望を紡ぎながら



N

らい 戦(いくさ)の時から七〇年
二度と過ちをくりかえさないと誓ったかつての少年は
いま 告げる

あつと降る雨の日 かんかん照りの夏の日
そんな人生のそんな日々は
雨やどり 道草 寄り道 回り道
ゆっくりりと 歩け歩け 進め進め

なぶとは まことを胸に刻むこと
教えるとは ともに希望を語ること
しっかりとまなべ しっかりとあそべ

つと 背負えたランドセル
友だちでできたかな 給食食べれたかな
トイレに行けたかな・・・
いま 出会いのはじまり
新しい一年生 おめでとう



子育て・教育のつとめ2017

同封のチラシをご覧ください

とき 5月14日(日)
ところ おかやま西川原プラザ
記念講演

「子ども・学校があぶない！」
～「教育再生」のねらいと子どもの権利～

講師 世取山洋介 氏



第1分科会 今、岡山の教育は！？ 息苦しさの中味を探る
第2分科会 就学前の保育・子育て
～子ども・子育て新制度実施後の現実～
第3分科会 子どもの発達障害について考えよう
主催 子育て教育のつとめ2017実行委員会 086-238-7663